

哲學研究

第一號

第一卷
第一冊

現代の哲學

西田幾多郎

—

題して現代の哲學といへば、廣く現代哲學を包括して、その發展の徑路及び相互の關係を論ずべきであらうが、余は今此の如き大問題を論じようと思ふのではない。此種の問題を論じたものは既に桑木博士の「現代思潮十講」といふ如き書が出て居る。余は唯現代哲學の中に於て、余が最も興味を有し且つ最も學問的にして研究に價すると思はれる二三の哲學に就て述べて見たいと思ふのみである。その説を是認するとは別にして、現代哲學に於て此種のものを探むれば、獨逸哲學に於てコルヒエを中心とするマルブルヒ學派、ザインデルバント、リッゲルトを中心とする所謂獨逸西南學派、及びブレンタノを先達とせるマイノングやリップスなど、特にボルツァノを復

興して此種の學派の思想を總合し發展したる觀あるフ、サールの一派とである。此等の學派と全然その源を異にして居るが、深き内省と直觀とに富み、天才的火花に打たるゝ如き感ある佛國のベルグソンの哲學も固より我々の深き研究に價するものと思ふ。余は今少しく此等の哲學に就て叙述し、且つ各その基く所を異にせるに關らず、いづれも現代哲學として、現代哲學の問題に於て如何に相觸れ相補ふかを論じて、聊か初學者の、參考に供したいと思ふ。

近世哲學のはじめ、中世の權威思想に反抗して起つた自覺の精神は、十八世紀の啓蒙哲學に至つて、一度その仕事を成し遂げたかの觀がある。啓蒙哲學に於てすべての神秘的なるものは排除せられ、道德も宗教もすべて明晰なる理性の上に建てられ、ばならぬ様になつた、即ち我々人間の理性といふものが最終の權威となつたのである。併し翻つて考へて見れば、啓蒙哲學は果して深い意味に於て自覺の根抵に達し得たであらうか。啓蒙哲學の理性といふのは、自然科學的理解力に過ぎなかつた。悟性的個人(verständiges Einzelwesen)といふものがすべての物の最高權威と認められるに過ぎなかつた。我々の精神を支配する最終の權威を單に論理的理解に求め、人間を論理的理解の法則に従ふ機械の如くに見做すのは、却つて人性に對する大なる抑

歴ではなからうか。是に於て啓蒙思潮に對する反抗の聲は先づ詩人の群から起つた、これが十九世紀の始に於ける所謂浪漫的思潮の嚆矢である。哲學に於てはカントが丁度啓蒙思想の終り浪漫的思想の始めに立つのである。

カントは當時の數學及び自然科学を信奉し、すべての外界的權威をすて、内面的理性にすべての價値の根柢を求めようとするのは啓蒙思潮と同一傾向であるが、これは深く知識の根柢を反省して數學や自然科学知識の據つて立つ所の根柢を明にした。これが有名なる批評哲學であつて、哲學に於てはコペルニクスの偉業にも比すべきものである。カントに従へば、我々の客觀的知識は純粹統覺の綜合によつて成立するのである、所謂自然科学の世界は純我の總合作用によつて成立するのである、純我が自然の立法者であるのである。斯く考へれば人間の理性は自然界の一部ではなく、却つて自然界は理性によつて成立するのである、主觀は客觀に依存するのではなく、客觀は主觀に依存するのである。勿論カントの我は心理的我ではない、個人的主觀ではない先驗的主觀である、存在的意識ではない價値意識である。若しこの兩者を明に區別せなければ、カントの立場は直にバロクレーの立場に戻らねばならぬ。カントも此の如き誤解を恐れて特に此點を力説して居るのである。想ふに

4
ピーチスマスの家庭に育つた敬虔なるカントは、之によつて知識の根柢を明にする
と共に、その限界を明にし、自然科學的法則以外に道德的法則の根據を立てようとし
たのであらう。カントは第一批判を第二批評をかく爲に書いたか否かは知らぬが、
兎に角道德法の尊嚴を維持するといふことはカントにあつて深き内心の要求であ
つたことは拒むことはできない。カントの純理批評によつて知識の限界が明とな
り、自然法を超越する善の根據が立せられると共に、美の根據が立せられた。所謂眞
善美の價值判斷はそれそれ互に犯すことのできない獨立の根據を有する先天的要
求に基くものなることが明にせられた。今日の規範的意識或は價值意識の考は實
にカントの創見によるのである。それでは、此の如きカントの批評哲學は前の啓蒙
哲學に對して如何なる意義を有するであらうか。カントによつて我は外界の權威
から脱するのみならず、自然法の束縛からも脱することができた。カントは自然科
學的世界の成立の基に還つて、そこに深き大なる我の自由を見出した。カントの我
の自由は自然界の一員たる悟性的個人の自由ではなく自然界成立の以前の理性的
我の自由であつた。

右に述べた如くロマンチズムの足場は既にカントによつて置かれたものと考

へることが出来る。併し純然たるロマンチストたるにはカントはあまりに地味で、あまりに分析的であつた、フヒテの膽とノヴァーリスの夢とはカントに求めることはできない。カントは經驗的世界は純我の總合によつて成立することを明にした、併しカントでは、知識は形式と内容とから成立するものである、外から與へられた經驗内容を時間空間及び範疇の形式によつて構成したものが所謂客觀的知識である。形式は主觀に具つて居るのであるが、内容は之を外に求めねばならぬ。是に於て物自體の假定はカント哲學に於て缺くべからざるものであつた。カントの純我は世界の生産者ではなくて、單にその構成者たるに止まるのである。カントは此の如く知識の方に於て純然たる主觀主義となることが出来なかつたのみならず、また何處までも眞善美の價値の區別を明にしようといふ分析的態度を取つた。道德的判斷も、美的判斷も一般的妥當性を有するには相違ないが、理論的判斷とは全く異なつたものである。靈魂不滅や神の存在は實踐理性に於て缺くことのできない要求として主張したが、之と同時に單なるポステュラートとして、何處までも知識と區別すべきものなることを力説した。知情意の作用は同じく我に屬するとしても、若し知を以て情意に比するならば、前者は客觀的であつて後者は主觀的と見ることが出来る。

あらう。我の我たる所以は知識にあらずして寧ろ情意にあるといふことができる。かゝる見方から云へば、カントは未だ純我の深き根柢に達することができなかつたといふことができる。

カントの純我の立場に立つて、物自體の假定を放棄し純主觀主義によつて純然たる浪漫派の哲學を組織したのは、フイテである。カントの考を平易に云へば、外から來た感覺的内容が先づ空間時間といふ直覺の形式によつて統一せられて經驗的直覺(empirische Anschauung) 即ち知覺(Wahrnehmung) となり、更に之が範疇といふ理解力の形式によつて組織せられて知識即ち經驗となるのである。純我は此等の形式的統一の根柢たるに過ぎない。然るにフイテに於ては、我はそれ自身にて内容を生ずる創造的作用 (Tathandlung) である。フイテは後にかいた “Versuch” 1797 に於て、我といふこの概念は我が我に對して働くといふことである、而して此の如き働きの外に我といふものはなかと云つて居る (Der Begriff oder das Denken des Ich besteht in dem auf sich Handeln des Ich selbst; und umgekehrt, ein solches Handeln auf sich selbst giebt ein Denken des Ich, und schlechthin kein anderes Denken)。即ち我は das sich selbst Setzende であつて das sich selbst Setzende は我である、而してかくの如き作用が即ち我の存在である。 („Grundlage“ の方

に於ては Also das Setzen des Ich durch sich selbst ist die reine Tüchtigkeit desselben.—Das Ich setzt sich selbst, und es ist, vermöge dieses blossen Setzens durch sich selbst, und umgekehrt: Das Ich ist, und es setzt sein Seyn, vermöge Seines blossen Seyns.—Es ist zugleich das Handelnde, und das Produkt der Handlung; Handlung und That sind Eins und ebendasselbe; und daher ist das: Ich bin, Ausdruck einer Thathandlung,と云つて居る。我々の「我」が右の如きものであるとするならば、自覺に於ては考へるものと考へられるものとか一であつて、即ち主觀と客觀とが合一すると云はねばならぬ、フイヒテは之を知的直觀(intellektuelle Anschauung)といふ。普通の意識に於ては、主客相分れ、その間に懷疑を入れるべき餘地はあるが、自覺に於ては主客合一が直覺せられるのである。余はフイヒテによつて初めて宇宙の核にして、アルヒメデスのブー、ストーともいふべき自覺の真相が明にせられたと思ふ。右の如き主張は一種の獨斷であるとか、循環論證であるとか考へられるかも知らぬが、これは實にフイヒテもいふ如く第一の無條件的原理(erster, schlechthin unbedingter Grundsatz)である。之なくして何等の意識も成立することはできぬ、所謂避くることのできなない循環論證(mit-
vermeidlicher Zirkel)である。フイヒテは嘗てカントが純粹悟性の概念と直覺の形式と

た。空間、時間の直覺的形式もフイヒテにあつては思惟に對して外から與へられたるものではなく、思惟の中から發展し來るのである、我が我自身の作用を直觀するによつて導き來ることができるのである。余は今フイヒテの哲學に立ち入つて、此等の過程を詳説する暇はないが、フイヒテに於いて世界は私の發展である、カントとに於ては單に價値の根柢であつたものがフイヒテに於て實在の根柢となり、而して此の如き理論的私の根柢は實踐的私にあると考へられる様になつた、知識界は道德界に從屬する様になつた。フイヒテが斯く主觀的立場から見、世界を、私の發展と考へたのを、シエルリンクは之を客觀的立場から見、客觀的世界即ち自然、其物の中に我即ち精神を見出した、而して實在は精神と自然との同一 (Identität) であつて、精神と自然とはその兩極であるといふ Identitätsphilosophie に達した。それでシエルリンクに於ては藝術が Organ der Philosophie となつた。更にヘーゲルに至つて、これが理性の辨證法的發展 (dialektische Entwicklung) となり、世界は理性の發展といふこととなつたのである。斯くして十九世紀の始に於ける浪漫派の哲學が發展したのであるが、學問と詩との合一を主張するロマンチズムの精神は特に能くシュライエルマッヘルの宗教觀に於て現はれて居ると思ふ。學問の根柢にも理性の無限があり、藝術の根柢にも理性の

無限がある、學問は汝に於ける物の存在 (das Sein der Dingen in Euch in, Euer Vermuße) であり、藝術は物に於ける汝の存在 (euer Sein in den Dingen) である。而して此兩者の統一を生命の深き拜殿 (das innerste Heiligtum des Lebens) に於て見出すのが宗教的直観である。宗教は Sinn und Geschmack für das Ueendliche である。シュライエルマッヘルは敬虔なる宗教的感情に於て兩者の統一、宇宙の根抵を見た。更にシュライエルマッヘルがスピノザと併べて尊敬した詩人ノヴァーリスに至つては、すべての物が詩の中に溶解せられ、すべての物が情 (Gemüth) である、情は光が萬物を照してその色を現はすが如くに萬物を照するのである。ハインリッヒ、フォン、オフトアイティンゲンが憧憬の對象として求めた、青き花は此の如き世界に於て見出されるのである。ハインリッヒは長き旅に於てすべての現世的なものを體驗して後、此の如き情の故郷に還つたのである。

カントによつてその足場を築かれたロマンチズムは、フヒテ、シエルリング、ペーデルの哲學を生じ、同時にシュライエルマッヘルの宗教となり、一方に於ては浪漫派の詩人と結合して、ロマンチズムは一時思想界を風靡した。カントの價值は存在となり、カントによつて分たられた眞善美の價值はその根抵に於て統一を見出された。然るに十九世紀の半頃になつて之に對する反動として實證主義の時代が來た。そ

れには思想其物の内面的轉化から來た理由もあらう又自然科學の勃興とか或は獨逸の物質的發展とかいふ如き外面的理由もあるであらう、兎に角十九世紀の半頃に於て自然科學や歴史的研究の隆盛に伴ふて實證主義の思潮が一代を支配したことは事實である。哲學に於てはビヒネル、モレシヨトなどいふ唯物論にすら耳を傾けられ、文學に於てはゾラの實驗的小説などいふものが勢力を逞うした。併し斯く實證主義が一時その隆盛を極めたにも關らず、遠からずして行きつまらねばならなかつた。十九世紀の終頃になつて種々の方面から自然科學的知識の限界及びその性質に關する批評的思潮が起つた。其中に就て最も有力にして現代哲學の基礎となつたものは所謂新カント學派の思潮である。余は此間の歴史的敘述を朝永博士の近著「近世に於ける我の自覺史」に譲りて、茲には之を省略しようと思ふ。

二

「カントに還れ」といふ呼聲によつて復起した現代の新カント學派の中で、最も重要なものはコーエンによつて創められたマルブルヒ學派と、ウインデルバントによつて唱へられた獨逸西南學派とであらう。新カント學派の先鋒ともいふべきオ

ツト、リ、ロ、ブ、マンですら尙カントのアプリオリに就て眞にカントの意味を解して居なかつたと云はれる。獨りコーエンは早く既にカントのアプリオリの眞意を理解し、存在と價值とを峻別して、アプリオリを全然價值の根柢となし、時間空間及び範疇を以て科學的知識の *sine qua non* たる方法の意義に解した。加之、カントの考を更にカント以上に徹底し、原因としての物自體の考を排斥し、時間、空間といふ如き直觀の形式よりも思惟の綜合が根本的なることを明にした。此點に於ては、コーエンとウインデルバントと同様であるが、コーエンは思惟を生産的 (*originend*) と考へることによつてウインデルバントとは異なつて居る。カントにあつては、範疇と空間、時間とは別種の形式であつて、範疇が時、空の形式によつて組織せられた經驗的直覺 (*empirische Anschauung*) と結合することに依つて、我々の客觀的知識即ち經驗が成立するのである。然るに、コーエンは思惟其物が生産的であつて、時、空の形式は思惟自身から必然的に發展すると考へることによつて、著しくフヒテの *transzendente Deduktion der Kategorien* の考に近い。コーエンははじめマールブルヒ學派の人々はフヒテと同一視せられるを嫌ふにも關らず、兩者の類似を否定することはできまいと思ふ。普通には思惟は單に統一的綜合 (*Synthesis der Einheits*) と考へられて居る、統一は統一せらるべき多様

を假定せねばならぬ、この多様は思惟に對して外から與へられると考へられて居る。併し我々の客觀的知識の根柢となる眞の思惟は創造的である、思惟の内容は外から與へられるのではない、思惟に對して與へられるものは思惟によつて要求せられるのである、與へられたもの(das Gegebene)は問題として與へられたもの(das Aufgegebene)である。思惟はそれ自身にてその内容を生ずるのである、思惟の作用其物が思惟の内容である (Erzeugung selbst ist das Erzeugnis)。多は一を要求し一は多を要求す、思惟は分離と共に綜合である (Die Sondernung muss ebenso sehr und ebenso bestimmt als Vereinigung gedacht werden)。知識の發展は新なる内容を外から得ることによつて進むのではない、知識の發展は思惟がその元に還るのである、不純なる内容を純化するのである、氏の所謂連續原理によつて思惟は何處までも元に還つて知識を建立するのである。カントでは思惟と異なつた根柢を有する直覺の形式として、思惟は之と結合することに依つてその客觀性を得ると考へられた時空の形式は、コイエンでは純粹思惟の中から發展する思惟の範疇として考へられる様になつた。客觀的知識の基たる思惟は所謂論理的思惟に止まることはできぬ、更にその背後に横たはれる一層具體的な思惟に進み行かねばならぬ、於是先づ經驗的知識の基たる數學的思惟が發展し來たら

ねばならぬ。數學的思惟は先づ單位 (Einheit) 即ち「一」を生じ(コイエンは單位を無限小と考へて居る)「一」は「多」(Mehrbheit)を生じ「多」と「一」の結合は「總體」(Allheit)を生ずる、この「一」が數の範疇であり「多」が時間の範疇であり、總體が空間の範疇である。斯くして時空の形式は思惟其物の本質たる知識の客觀性の要求から必然的に發展する範疇に過ぎない。思惟が實在を考へるのではなく、實在は思惟によつて成立するのである(Das Denken kann, das Denken soll das Sein entdecken)。コイエンの考は „Kants Theorie der Erläuterung.“ と „Das Prinzip der Infinitesime-Methode und seine Geschichte.“ といふ小冊子を併せ考へれば、既にその根柢を知ることができるのであるが、此等の書に於ては未だ氏の創造的思惟の考が十分に言ひ現はされて居るとは云はれない。「純粹知識の論理」(Logik der reinen Erkenntnis)に至つてコイエン自身の哲學體系が完全に組織せられて居ると思ふ。以上述べた如く、コイエンは思惟を自發自展的進行となし、實在性の基たる時空の形式をも思惟の範疇として、思惟其物から導き來ることができたとしても、此の如き考をとる人の常として此處に一つの難問に遭遇せねばならぬ、即ち知識の形式とその經驗的内容との結合の問題がそれである。コイエンも „Die transszendentale Methode scheint an die Empfindung zu scheitern.“ といつて居る。併し是に於ても、コイエン

14 はカントの如く内容は外から與へられることを許さない。與へられるものは思惟によつて要求せられるものでなければならぬ。コーエンの考では所謂感覺なるものは未だ實在の知識ではない、單に實存の知識の指標 (Index) たるに過ぎない。感覺の内容が知識の體系の中に入つてその客觀性を要求し得るには思惟の範疇に當嵌らねばならぬ即ち *Grundsatz der intensiven Grösse* の要求によつて内包量と見做されて、はじめて經驗的知識界にその市民權を得るのである。單なる感覺は即ち *Bewusstheit* の状態ではこの權利を有せない。感覺は思惟に對して説明せらるべく與へられたものである、感覺の内容は非合理的ではない、合理化せらるべき *Wesen* に過ぎないのである。思惟と感覺との結合が先づ右の如く解決し得るとして、尙一つマイルブルヒ哲學に對して問題となるのは意識の問題であらう。我々が意識するとは如何なることであるか、意識の事實は何處から起つて來るか。コーエンは *Bewusstheit* と *Bewusstsein* とを區別し *Bewusstheit ist Mythos; Bewusstsein ist Wissenschaft*. とし、或經驗經驗的内容が意識せられるや否やはその内容自身に何等の變化を與へない、經驗的知識の内容に對する意識の状態はその様式 (*Modalität*) に過ぎない。知識は思惟の自發自展によつて成立し、その可能の様式 (*Modalität der Möglichkeit*) が意識となるのである、意識

は思惟の一範疇に過ぎない。つまりコーエンはカントのアナリチクに於ける純粹悟性の総合的原則 (Synthetische Grundsätze des reinen Verstandes) といふものを知識成立の根本的條件と考へ、その第一より第三までの原則によつて數學的自然科學即ち客觀的知識内容の範疇ができ、その第四の要求 (Postulat) が意識の範疇に當るものと考へたのである。ナトルプは心理學に於ては主觀客觀の區別を意識統一の程度即ち客觀化の程度の相對的區別となし、正とか負とか右とか左とかいふ如き意識の相反せる兩方面の區別と考へて居る。「純粹知識の論理」に於てコーエンは數學、科學の材料によつて以上の考を詳論して居る。コーエンの材料とした數學、物理學の知識は此等の學問に於ける現代の進歩から見て不十分な點もあるが、兎に角此書は現代の獨逸哲學に於て恐くはヘーゲルの論理學以後の著述といつてよからう。

次にコーエンと對立して、新カント學派の重鎮ともいふべきウインデルバントの哲學に就て一言して見よう。ウインデルバントもコーエンの様にカントの批評哲學の考を更に徹底し、物自體の考を排斥し、知識の根柢を全然思惟の要求に置いた。加之、カントは常に數學や物理學を眼中に置いて知識の性質を論じ、コーエンも此點に於てはカントと異なつて居らぬのであるが、ウインデルバントは一層廣く着眼して何等

が眞理といふものがあるならばといふ如き立場から出立した。眞理を論ずる前には、規範意識を假定せねばならぬ。一般妥當的知識は模寫說にて考へる様に、外界又は内界の實在に合ふによるのではなく、何人も認めねばならぬ規範的意識によつて經驗的内容を構成するによるのである。存在の前に價值がある。知識が實在に合ふことによつて眞理となるといふ前に、實在のあるといふことが眞理でなければならぬ。眞理の規範意識を認めない人とは議論は出來ぬ、眞理は規範意識の假定によつて成立するのである。斯く云へばそれは循環論證にすぎぬといふでもあらう、併し避くべからざる循環論證は之をなさねばならぬのである。これが西南學派の目的論的批評論たる所以であつて、即ち知識の根柢に意志を認めて居るのである、理論的理性の基に實踐的理性を置いて居るのである。斯く、すべての價值判斷は先天的規範的意識によつて成立するので、此の如き價值判斷に缺くべからざる條件を論ずるものが論理學、倫理學、美學である。此等の學問は純粹價值の形式的學問であつて、その内容は歴史的に發展するのである。ウンデルバントは右の如くカントの批評哲學を極めて一般的意義に解することによつて、自然科学的知識のみに拘泥せず、之と對立して、全く異なつたアプリオリの上に立つ歴史學といふ經驗的科學をも認め

ることができた。カントやコーエンでは構成的原理(Constitutive Grundsätze)であつた自然科學的の原理はウンデルバントでは規制的原理(regulative Grundsätze)となつた。即ちテレオロギー・シユのものとなつた。リッケルトに至つては更にその師の批評哲學の考を明晰に徹底して、認識の對象に於て、認識の對象の不許不なることを明にし、批評法を嚴密に心理主義から區別して、眞理は思惟の必然性によつて立せられるのではなく、思惟の必然性は却つて不許不を假定することによつて解せられるのであると論じて居る。特に其後に書いた「認識論の二途」に於ては、先驗的心理學と先驗的論理學とを區別し、認識の對象に於て用ゐた方法をも尙前者に屬するものとして之を排し、純粹に何等の心理的見方を交へざるボルツァノの文章自體(Satz an sich)といふ如きものから、認識論を立すべきを論じた。前に認識の對象とした「不許不」の語もその心理的意義を混するを恐れて、「價值」といふ語を用ゆべきことを主張するに至つた。是に於て西南學派の認識論は著しくボルツァノの純論理主義に接近して、之に結合するに至つた。(マールブルヒ學派及び西南學派の精細にして明確なる叙述及び比較は、大正三年二月及び三月の哲學雜誌に載せられた田邊(元)文學士の「認識論に於ける論理主義の限界」といふ論文を參考せられんことを望む。)

余はボルツァノ學派の哲學を叙述する前に、先づ一たびマールブルヒ學派と西南學派とを包括して考へ、且つ此等の學派とカント及びフイヒテとの關係に就て一言して置かうと思ふ。此等の學派は共に認識論上の心理主義に反對し、事實の問題と價值の問題とを峻別し、カントの昔に還つて、何處までも認識論を嚴密なる批評的方法の上に立てようとするその根本主義に於ては、眞にカントを繼承するものとして、彼等が自ら標榜する如く、新カント學派といふことができる。併しカントは感覺的內容が時空の形式によつて構成せられたもの即ち所謂經驗的直覺を、思惟の範疇に對して、獨立な知識の要素と考へ、感覺の原因としての物自體の考も必要とした。然るに右兩派の如き現今のカント學派は全く此考を排斥し、知識成立の根柢を純粹思惟に置いて居る。コーエンは時空の形式を思惟其物から發展すると考へ、西南學派は此等の形式を構成的範疇となし方法論的思惟の範疇と區別して居るが、いづれも純粹思惟を以て知識の基とするのは一である。斯くして感覺の原因としての物(*dingen* *de Dinge*)と云ふ如き考は全然批評哲學から排斥せられることとなつた。すべて現今の哲學では經驗的所與(*das Gegebene*)に就ての考がカント時代のものとは異なつて居る。今日の哲學では、與へられたものとは所謂感覺的經驗の如きものではなく、體驗

とか純粹經驗とかいふものと考へられて居る。此點に於ては新カント學派の人々もその反對と見らるべき心理主義や實用主義又は直觀主義の人々も同一である。シッペなどの内在的哲學やマッハ、アヴェナリ、リースの純粹經驗論からジェームスの根本的經驗論、ベルグソンの純粹持續説など皆然らざるはなしである。無論此の如き所與についても種々に考は異なつて居るのであるが、兎に角現代の哲學者は所與としてリッケルトの所謂概念以前 (*das Vorbegriffliche*) といふ如きものを考へて居る。西南學派では此の如きものが構成的範疇に當嵌つて客觀的實在 (*objective Wirklichkeit*) として與へられ、之を或方法論的のアプリオリから組織して見たものが我々の科學である。種々のアプリオリの異なるに従つて種々の異なつた科學ができると考へて居る。實在と知識との關係に就てはウンデルバントなどは全體と部分との關係の如く考へて居る様である。氏はこの兩者の區別は質的區別ではなく量的區別であると云つて居る。マールブルヒ學派に於ても所與は感官的經驗ではない、ナトルプの如きはその心理學に於て明かにベルグソンの純粹持續の如きものを認めて居る。知識と實在との關係に就ても與へられたものは要求せられたものである、理性の透徹し得ざるものはない、非合理的なものとは不可知的ではなく *das m̄ òu dor Eukho* に過ぎなす。

20
唯マールブルヒ學派では、思惟はそれ自身にて内容を生し、思惟と實在とは一であつて、而もその思惟は數學的、自然科學の思惟として一定の型を有するのであるから、實在の性質は知識によつて豫料し得るものとなり、兩者の接近は西南學派のそれよりも密接なものとなつた。西南學派の方では、思惟の形式は單に思惟對象の條件を定めるのみであつて、その内容は撰擇的で自由であるから、實在と知識との關係は不定的なものとならざる得ない。コーエンはカントの「純理批評」に於けるアナリチクの純粹悟性の綜合的原理によつて思惟の性質を考へ、ウインデルバントは寧ろダイヤラクチックの終に於ける純粹理性の規制的原理によつて之を考へて居るとも見られるであらう。更に此等の學派のフイヒテに對する關係を考へて見れば、何人も此兩派とフイヒテと類似の點を見逃す能はざるにも關らず、この兩派は共にフイヒテを以て形而上學的と考へ、何處までもカントの認識論的立場に止まつて、フイヒテの立場と異なることを主義として居る。ウインデルバントはフイヒテがカントの規範意識を目的論的に解したるを稱し、氏の認識論もフイヒテの如く知識の基に意志を見る一種の主意説たるに關らず、フイヒテの知識學(Wissenschaftslehre)は目的の規定から實現の手段を演繹しようとしたのは誤であると云つて居る、即ち何處までも價值意識と存在意識と

を區別しようといふのである。コーエンの哲學の根本たる純粹思惟の發展は前にも云つた如くフイヒテか先驗的に範疇を演繹した考と非常に類似せるに關らず、コーエンはフイヒテとの關係を拒み、氏の考はプラトリーの理想を力學的に解したもので、プラトリーの *Parakletos* の考に基いたものといつて居る即ちプラトリーとカントとを結び付けたものと考へて居るのである。コーエンはフイヒテに對して、カントの認識論的純我の立場からデカートの *Cogito ergo sum* の立場に逆戻りしたものとして非難して居る。ナトルブもマールブルヒ哲學がフイヒテ、ヘーゲルの哲學と同一視せられることを嫌ひ、ヘーゲルもマールブルヒ學派も共にすべてが思惟であると主張するが、ヘーゲルは不變の絶對を認め、マールブルヒ學派は單に無限の過程を認める點に於て異なつて居ると云つて居る。此等の人々のフイヒテ、ヘーゲルに對する見方が全然正當なるや否や、又此等の學派が何處までもその立場に止まり得るや否やの議論は別にして、兎に角此等の人々は右の如く主張して居るのである。

三

余は向に西南學派に屬するリッゲルトが認識論上に於ける心理主義に反對する結

果、一般的妥當なる認識の對象として意味の世界價值の世界を認めねばならぬこととなり、認識論の出发点をボルツァノの文章自體といふ如きものから、始めねばならぬと主張するに至つたことを述べた。余は之より少しくボルツァノやブレンタノからフッサールに至るまでの哲學を略叙して、前に述べた新カント學派との關係を論じて見たいと思ふ。

我々の個人的意識の中に時間的に生滅する所謂精神作用と、個人的意識を超越する客觀的存在の世界との對立を考へる外に、我々の表象や思惟の對象として明に意味の世界價值の世界といふ如きものを考へ、之に依つて純論理主義の先驅をなした人は十九世紀の前半に出たボルツァノであるといはねばならぬ。哲學者であると共に數學者であつたボルツァノは、當時盛んであつたカント學派の傾向に反し、寧ろ溯つてライブニツツの考に基き、痛くフィヒテ、ベーケルなどを嫌ひしはいふまでもなく、カントの如く認識の根柢を我の總合作用に置くのは尙心理主義に陥るものとして之れを排し、考へられた眞理 (gedachte Wahrheit) と眞理其物 (Wahrheiten an sich) とを峻別し、論理學は全く考へられた眞理と離れて、純粹に眞理其物に就て論ずべきことを主張した。論理學を單に形式の學と考へるのも、畢竟思惟の主觀的形式と考へるによる

と云つて居る。それでホルツァノに従へば我々の種々の表象や判断に對して此等の心理作用を超越してその對象となる表象自體 (Vorstellungen an sich) と文章自體 (Sätze an sich) とかいふものがなければならぬ。眞理といふのは此の如き文章自體の中の一に過ぎないのである。文章自體は表象自體から成立し、文章自體の中にて實在的存在 (Wirkliches Dasein) を有つたものだけが眞理であるといふのである。無論ホルツァノが此處に實在的存在といふのは所謂存在のみをいふのではない、廣き意義に於て何人が何時考へても不變なものといふのである、數學的眞理の如きものも存在の中に入り居るのである。文章其物は單に此の如き眞理のみではない、例へば「圓き四角形」といふ如き對象なき表象 (gegenstandslose Vorstellungen) がある様に、誤謬の文章自體といふものは無論あり得べき筈である。ホルツァノは此の如き考を基礎として氏の „Wissenschaftslehre“ を組織して居る。

以上述べたやうな表象自體とか文章自體とかいふ考はホルツァノの非常に獨創的な考であつて、氏が當時に於て全くその價值を認められなかつたにも關らず、氏を今日の純論理派の創立者と目せねばなるまい。而してホルツァノの議論は今日の所謂純論理派の人々のやうに全く認識作用の分析を棄てて、純論理的に表象自體とか文

24
章自体とかいふものから出立して居るが、心理現象の内省的分析から出立してホルツァノと同様の考を出した人はフランツ・ブレンタノであらう。前者は客觀的立場から出立し、後者は主觀的立場から出立して、同様の考に到達したものと云ふことができるであらう。ブレンタノはホルツァノに比すれば大分時代が遅れて居り且つブレンタノはホルツァノに基いたとは云はれない。氏自身はアリストテレスやトーマス・フオン・アクイノなどに基いたと云つて居るが、余は此の二人を現今に於ける是等の思想の源と考へることができないかと思ふ。ブレンタノの心理學の根本的思想は精神現象と物體現象との區別である。ブレンタノは精神現象と物體現象との區別は現象其物の中に對象を含むと否とにあるといふ。即ち精神現象の特徴は昔しスコラ學派の云つた如く對象の内在 (*die intentionale Inexistenz des Gegenstandes* 即ち *immanente Gegenständlichkeit*) といふことである。意識するといふことは對象即ち意味を己自身の中に含むといふことである。それで、すべて精神現象は二つの方向から成立つて居るといふことができる、一つは色とか聲とかいふ所謂意識内容即ち内在的對象であつて、一つは表象とか判断とか感情とか意味とかいふ所謂作用の方面である。すべての意識は此兩面を具へて居る。所謂精神作用の種類の區別といふのは

對象に對する關係(intentionale Beziehung)の種類の區別に過ぎない。ブレンタノは表象作用といふものを最とも根本的と考へ、判斷とか感情とか意志といふものは之れに附加せられるものと考へて居る。ブレンタノの判斷と情意(Liebe oder Hass)とを同種となし、此等と表象とを對立せしめた獨創的な精神現象の分類は之によつて理解せられるのである。ブレンタノの考が右の如くであるから、余はブレンタノが内在的對象即ち内容と云つて居るものは、全くボルツァノの表象自體とか文章自體とかいふものを内在的に考へたものであると考へる。兩人の相違は一人が論理學者として超越的に考へたものを、一人が心理學者として内在的に考へたまでである。而してマイノングの對象論(Gegenstandstheorie)は全くブレンタノの内容の考を發展したものに過ぎないのである。

ボルツァノが表象自體とか文章自體とかいふものを明にし、ブレンタノが意識の内容と作用との區別を明にしたとすれば、次に起るべき問題は、この三つのものゝ區別及び相互の關係を考へることであらう。之を考へたのが丁度ポーランドの學者トワルドウスキの“Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen” 1894である。此の書は小冊子ではあるが、ボルツァノ及びブレンタノからフッサールに移り行く道行き

として意味あるものであると思ふ。トワルトウスキーは表象に於て作用(*Wirkung*)と内容(*Inhalt*)と對象(*Gegenstand*)との三つのものを峻別して居る。作用と内容との區別は更らに説くを要せないと思ふが、トワルドウスキーは對象と内容とは、往々同じく對象の語を以つて言ひ表はされるに關らず、決して同一ではない、前者は超越的にして後者は内在的である、此の兩者は何處までも區別せなければならぬと云つてゐる。例へば等邊三角形と等角三角形といふことは、意識内容としては異なつたものであるが、對象としては同一である。氏は單に表象に於てのみならず、判斷に就ても無論右と同じく三つの區別ができると云つて居る。思惟の對象といへば思惟作用と何等の關係なき超越的なものであるが、思惟の内容とは對象の符號として意識内に現はれ肯定又は否定せらるべきものである。若し之をマイノングの語を以て云へば假定(*Annahmen*)の對象たる *Objektiv* といふ如きものである。トワルドウスキーは命名作用(*Nennimg*)に就ても右の如き三様の區別ができると云つて居る。

トワルトウスキーがボルツァノとブレタノとを纏めて右の如き三様の區別を明かにしたとすれば、次ぎに起るべき問題は此等の三つのもの關係を考へることであらう。余は是に於てフッサールの現象學研究 (*Phänomenologie*) の如きものが起らねばな

らぬと思ふのである。フッサールの現象學とは一言に云へば此等の三つの區別の未だ起らざる以前の立場即ち純現象學的 (rein phänomenologisch) の立場からして此れ等の三つのものの關係を考へようと云ふのである。フッサールは先づ我々の知識に就てこの研究を試みた。その書が氏の「論理的研究」(Logische Untersuchungen)である。「論理的研究」に於ては、氏は普通の論理學や認識論とその出立點を異にし、全く心理學的見方を棄てて、言表とか作用とか意味とか對象とかいふ如き概念を内省的に區別し明晰にすることから始めて居る、これが氏の所謂現象學的研究といふのであらう。

氏は先づ言表 (Ausdruck) といふものに就いて物質的方面 (physische Seite) と精神的方向 (psychische Seite) 即ち作用 (Akt) とに區別して居る。此處に注意して置かねばならぬのはフッサールの作用といふのは意味の體驗 (intentionales Erlebnis) といふ如きものであつて、ブレタノの作用よりは一層具體的なものである。即ちブレタノの内容と作用とを合したものを、否未だこの二つのものの分れない前の所與的統一である。フッサールは作用を材料 (Materie) と性質 (Qualität) とに分つて居るが、その作用の性質 (Aktivaität) といふものが丁度ブレタノの作用に相當すると思ふ。單に音聲である言語は此くの如き精神的方面即ち作用が加はることによつて意味ある言表 (sinnto-lebter Aus

Druck)となるのである。フッサールは右の如き作用に就て意味附加の作用 (Bedeutungsverleihende Akte)と意味充實の作用 (Bedeutungserfüllende Akte)とを區別して居る。前者は單に物質的言表に意味を與へ、之れをして言表たらしめるだけの作用である、後者は言表をして單なる意味の言表たるにまらしめず、その意味の對象的關係を實現して行く作用である。それで作用の中にあつて對象を代表する作用の内容即ち意味 (Sinn)にも intendir- oder Sinn 即ち Bedeutung schlechthin と erfüllender Sinn と二種あるのである。對象といふものはトワルドウスキヤなどの考のやうに全く言表や作用を超越したものと考へられて居る。フッサールは此くの如き作用の對象となる。ideale Einheit der Species 即ち Wesen と稱するものは、決して普通に考へられる如く抽象作用とか概括作用とかによつて作られたものでなく、意味の統一として最初から與へられたものであることを論じて居る。これは恰かもボルツァノの表象自體とか文章自體とかいふものに相當するものであらう。フッサールは右に云つた如く言表、作用、意味、對象などの意義及び相互の關係を明らかにした後ち、知識の現象學的説明の方へ歩をすゝめて、氏の所謂作用即ち intentionales Erlebnis といふものは即ち我等の意識であると云つて居る。意識は作用と同意義である、我々の自己とは此の如き作用の無限なる連續

の統一點にすぎない。斯く考へて見れば、我々の知的作用といふのは作用の一種たることは言ふまでもない。認識するといふことは、意味の基となる直覺と、意味を含む作用との結合である、言表と言表せられた直覺との同一の意識である。而して向に云つた様に有意味的作用に意味附加と意味充實との二種あるから、此の如き同一の意識にも靜的統一 (statische Einheit) と動的統一 (dynamische Einheit) との二種がある。前者は單に命名とか分類とかいふ如きもので、後者は種々の關係の知識の如きものをいふのである。知識が進むといふのは直覺の方に向かつて充實せられて行くことである、即ち直覺と一致することである、その極致は *Adäquation* である。但しフッサールの直覺といふのは普通の知覺のみを指すのではない、種々の關係の意識といふものをも含んで居るのである、種々なる關係の意識も直覺的に與へられると考へて居る。

以上述べた如き考によつて、フッサールはその論理的研究に於て我々の知的作用に就て、所謂自然科学的心理學の研究に反し、現象學の立場から意味を含むものとして、對象との關係から見て、非常に精細なる研究をなして居るが、氏は論理的研究に於ては未だ氏の研究の立脚地たる純現象學的立場といふものを明にして居らぬ。之

を明にして純現象學といふ一家の哲學を構成しようとして居るのは、哲學及現象學的研究年報の中に載せられた „Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie” といふ論文である。無論この論文は未だ完成しないのであるが、之に依て氏の哲學の大體を知ることが出来る。此書に論ずる所によれば氏は先づ本質 (Wesen) と事實 (Tatsache) とを分ちて、前者の學問を本質の學問 (Wesenswissenschaft) といひ後者の學問をば事實の學問 (Tatsachenwissenschaft) として居る。前者は例へば論理學、數學等の如きもので、後者は普通の經驗的科學の如きものをいふである。而して前者は後者から獨立であるが、後者は前者に依存するものと考へて居る。學問的知識とは如何なるものであるか。我々の直接經驗は無限の流動であるが、我々がこの流動を或る一の立場から止めて見たとき、種々の世界ができる。自然的見方によつて自然界ができ、數學的見方によつて數學的世界ができる。フッサールは Einstellung といふ語を用ゐて居るが余は多少不適當かも知らぬが、分り易くする爲め見方いふ如き語を用ゐて置く。我々の學問といふものは皆何等かの立場に立つて見たものである。此考は學問的知識は何等かのアプリオリによつて成立するといふカント派の考と同様である。それでは現象學とは如何なる學問であるか。現象學の立場は如

何なる立場であるか。右に云つた如く種々の立場によつて種々の世界ができるのであるが、此れ等の世界は皆 Cogito によつて結合せられて居る。現象學も本質學の一つではあるが、此れ等の立場を盡く除去 (ausschalten) して、純粹意識の立場に立つて見たのが現象學の立場である。すべての立場を除去して純我の立場から見たのが純現象學である。それで現象學は純粹に記述的 (rein deskriptiv) でなければならぬと云つて居る。要するに、フッサール自身も明言して居るごとく、フッサールの現象學はカントが「純理批評」の第一版に於て試みた先驗的心理學 (transzendente Psychologie) と同じものである。現象學の立場から見ると、我々の體驗は内容と作用といふ様に分れるが、氏は近頃之れに *Noema und Noesis* といふ語を用ゐて居る。此兩者は勿論一つの體驗の兩方面であつて、互に相關的でなければならぬ。現象學は純粹意識の立場から此等の關係を明にするのである。學問は何等かのアプリオリによつて成立するが、このアプリオリを純粹意識の立場に還つて反省し、その性質を明かにするのが現象學であるから、現象學は純粹意識の立場から學問其物を反省して、その性質を研究する學問といつてよからう。事實學は本質學に依存し、現象學は此等の學問の基礎となる、即ち學問の學問といふことができる。氏が「論理的研究」に於て試みたのは

32 論理的知識に對する此の如き研究であつたのである。

余は以上述べた哲學と同種の中に入るべきブレタノより出たマイノングや之と同傾向を有するテオドル・リップスの哲學を述べることを略することとする。併し之を略するのは決して此れ等の人を輕視したのではない。精細なるマイノングの研究や明晰透徹なるリップスの議論は余はこれを重んずるに於て人後に落ちない積りである。リップスに對しは、余は氏が晩年多病遂に十分なる哲學の體系を組織するに至らずして逝いたのを惜むものである。唯、今、時間のないのと以上述べた所を以て此種の思想の特徴を示すに十分と考へたから、之を略するまでである。ポルツァノよりフッサールに至るまでの思想の脈絡に就て述べた所は全く余の臆見に過ぎないから、他日誤謬を見出すことがあるかも知れない、又複雑にして要領を得難いフッサールに就て述べた中にも多くの誤解があることであらう。

四

余は既に現今の獨逸哲學に於ける新カント學派の大體とポルツァノ及びブレンタノ一派の哲學の大體とを述べたから、終りに此等の哲學關係に就て余の見る所を

一言し、かねて現今哲學の要點と思ふ所を述べて見ようと思ふ。ベルグソンに就ては、我國に於て既に多くの著述もあり、且つ余も嘗て少しく述べたこともあるから、今はその説を述べる必要はないと思ふ。カントとホルツァノとは恐らくは互に相反せる出立點から出立したものといつてよからう。ライブニッツの流れを受けつゝも英國のヒュームによつて啓發せられたカントは、ヒュームに對して知識の客觀性を維持しようとする答を、英國の經驗學派が依つて以て知識の主觀性を證明しようとする認識作用の深き研究に求めた。カントが知識成立の基とした純粹統覺の綜合といふ考へがそれである。此點から見てカントの研究は發生的であり、主觀的であると云ひ得るであらう、ホルツァノから見てカントが尙心理的であると考へられる之に依るのである。然るに元來數學者であつたホルツァノは、全く認識の成立作用に着目しないで、その對象たる意味其物から出立した。ホルツァノの文章自體といふものは、*„Reide, wenn durch Sie irgend etwas ausgesagt oder behauptet“*である。併し翻つて考へて見ると、認識對象の問題と認識作用の問題とは、何處までも離して考へることができらであらうか。カントより出立してカントの考を徹底して行つた西南派のリッケルトは、上に述べた如く、遂にホルツァノの出立點に到達せねばならなかつた。之と反對にポ

ルツァノを基礎としたフッサールは、ブレタノの考へを取り入れることによつて、遂にカントの先驗的心理學のごとき方法を取る様になつた。リッゲルトは對象と作用とを全く切斷して論じようと主張するが、フッサールはこの兩者を聯關せしめて論じようとして居る。マールブルヒ學派も自然科学的心理學には反對するが、先驗的心理學といふ如きものゝ必要を認めて居るといつてよからう、ナトルプの心理學の如き之を證するのである。要するに、カントとボルツァノとは一の圓周の兩點より出立したのに過ぎない、共に同一の輪上を走つて居るものである。カント派とボルツァノの對立を他の現代哲學の中に求めるならば、英米に於ける實用主義と新實在論との對立を擧げることができるであらう。前者は新カント學派のウインデルバントなどの眞理への意志(Wille zur Wahrheit)といふ如きものを個人的、主觀的に考へたものである。新實在論といふのは、ボルツァノなどの如き立場から、主觀主義の認識論に反對するものである。ラッセルなどの主張と獨國の純論理主義の主張とはその根本主義に於て大差ない様である。併し實用主義は單に認識論上の心理主義たるのみならず、認識の他律主義(Heteronomie)である。ウインデルバントなどの目的論的批評論は直にボルツァノなどの純論理主義に結合することができるが、實用主義は遂に之と結合するこ

とはできないのは之に依るのである。

以上述べた諸學派は其議論の異なるに關らず、之を要するに我々の概念的知識に就ての議論である。嘗てカントが物自體を以て不可知的となし哲學的議論を我々の認識其物に限つた様に、今日の獨逸哲學者も、カントの如き意味に於て物自體を考へて居らぬにも關らず、要するにカントの問題を考へて居るものといつてよからう。ホルツァノの如きカントとその出立點を異にするに關らず、氏の大著“*Wissenschaftslehre*”は一種の論理學である様に、その論ずる所は認識の問題であつた。併し我々は知識の問題に對しては實在の問題を考へない譯にはゆかない。無論今日の哲學に於て、認識に對して感覺の原因としての不可知的物自體を考へるとか、價值に對して自然科學的存在を考へるとかいふ如きことは既に時勢遅れの謗りを免れないであらう。併し知識の世界はそれ自身に完全なるものではない、知る」といふことそれ自身が、縦し模寫說のいふ様に適合することではなく、批評哲學のいふ様に構成することであるにせよ、概念的知識の世界以外に直觀の世界、神秘の世界を考へない譯にはゆくまい。西南學派のリッケルトの如きも明に知識以前の世界、體驗の世界といふものを認めて居る。唯此の如き世界は知識以前なるが故に、我々は之に就て何事もいふこと

はできぬといふまでである。コトエンは思惟に對して與へられるものは思惟によつて要求せられたものであり、感覺は知識の指標であるといふ。併し思惟の要求といふのは如何なることを意味するであらうか。思惟が創造的であるとしても、思惟は知識の形式を先見することができても、その經驗的内容を先見し得るであらうか。コトエンは思惟は自ら内容を生ずると論ずるも、その論ずる所は科學的法則の形式に過ぎない。眞に思惟即ち實在 (Denken || Sein) ならば、思惟の要求は單に^ミから起るのではなくして、^ミから起るのでなければなるまい。此處に直觀の世界、神秘の世界の假定が必要である。ナトルプはその心理學の始に於てベルグソンの世界を認めて居る。ボルツァノは、余の知る範圍に於ては、實在界を意識界との對立、價値と實在との對立に就ては尙因襲的思想を脱して居らぬ様であるが、フッサールの現象學的世界は明に一種の直觀的世界といはねばなるまい。以上述べた如く、認識の世界に對して、之が基礎として、一種の神秘的直觀の世界を認めねばならぬ。而してこの直觀の世界に就て、今の處、比較的最も能く之を捕捉し得ると思はれる人はベルグソンである。オイケンも此中に入るべきであらうが、彼は徒らに精神生活を叫ぶに急にして、精細な深い内省を缺いて居る様である。それで現今の哲學を大體に於て分

類して見れば、ベルグソンの如き直觀の哲學と今日の獨逸哲學の如き認識の哲學とに分れ、後者は新カント派と新ボルツァノ派といふ様に分つことができるであらう。而して英米學界に於ける新實在論はボルツァノ學派その傾向を同くし、實用主義は西南學派の目的論的批評論に似て、その目的の考へ方が主觀的個人的で従つて他律的であるといふことができるであらう。

現今の有力なる哲學を右の如く分つことができるとするならば、此等の哲學はそれぞれ立場に於て、それ相當に意味あるものと共に、互に排斥すべきものではなく、却つて互に相補すべきものであると思ふ。否、それぞれの立場から徹底し行くと共に相結合すべきものであると思ふ。十九世紀の始、啓蒙思想に反して起つたロマンチズムは、カントから出立しながら、著しく形而上學的で、一元論的であつた。現今のロマンチズムは分析的で、多元論的傾向を有し、著しく認識論的である。これは自然科學的感化によつて、我々の思想感情が分析的批評的となつた結果でもあらうが、さりとて我々の理性の要求深い深い我々の要求は遂に此處に止まることはできないと思ふ。既に云つた如くボルツァノの先驗的論理學とカントの先驗的心理學とは互に相補すべきものであり、フッサールの如きは明に此點に着眼して居るといふこ

とができる。マールブルク學派の如きも、無論論理主義ではあるが、西南學派に比して、多く此點を顧慮して居る様である。ナトルプの心理學第一卷の如きは此種のものとする事もできる。併しこの問題よりも、尙一層根本的にして而も困難なる問題は認識の世界と體驗の世界との結合の問題である。然るに此問題に就ては未だ十分なる解決を見ない。ベルグソンが直觀の世界を説くに當ては一種他の追隨をゆるさないものがあるが、認識の性質を論ずるに至つては、その考の極めて粗笨にして幼稚なるを免れない。之が爲め氏の認識論は一種の實用主義以上に出でぬのである。之に反し、獨逸哲學の方に於ては、認識の性質を論ずるのは精緻であるが、直觀の世界を説くものは極めて粗略であるといはねばならぬ。マイステル・エックハルトやヤコップ・ペーメの如き深い哲學者は現今の獨逸哲學界に求めることはできぬ。リッケルトの如く、體驗の世界は認識以外なるが故に何事をもいはぬと云へば、何等の議論を戦はず餘地もないが、コーエンの哲學の如き、余が上に云つた如く、思惟の要求に於て體驗の世界に接觸し、思惟即ち實在として、創造的と考へる邊は、殆んど直接流動の世界を現はすかの様に思はれるが、余は尙直觀其物から出立した、即ち *ミナ* の全體から出立した深い見方を缺いて居るではないかと思ふ。フッサールの現象學の

世界も一種の直觀的世界ではあるが、此世界が果して氏の云ふ如く純粹記述の世界であらうか。記述的といふ語の意味にもよるべけれど、余は氏の如き方法によつて、直接流轉の世界に於ける關係を表はすは不可能であると思ふ。フッサールは分析の精細なるに似ず、深さに於て缺けて居ると思ふ。余は現今哲學の重要なる問題は此處にあると思ふ。(此點に就ても前に舉げた田邊氏の論文を參考せられんことを望む)。これ即ち形を變じた「物身體」の問題である。大體に於てカントの傾向を帯びたる現今の哲學が同一の問題に撞着するのは自然の勢といはねばならぬ。

現今の哲學が、一方に於てベルグソンの如き直觀の世界を認めると共に、一方に於て批評的、分析的、多元的の傾向を有するのみならず、現今の科學とか、藝術とかいふものも同様の傾向を帯びて居るのではなからうか。數學では公理説が重んぜられ、それぞれの立場が嚴密に批評的に研究せられ、算術と解析と幾何とそれぞれの基礎が明にせられた。これまで數學として一つに纏められたものも、もはや一つのものとは考へられない様である。而してかゝる傾向の中に、學問の依つて立つ所のアプリオリを吟味し、知識を純化しようといふ新カント學派の精神が含まれて居ると思ふ。物理學に於ても、物理學の根本概念を實體化した獨斷的思想は漸次批評論的に純化

せられ、相對性原理の如きに至つては時空の如き概念すら明に方法論的に考へられる傾がある。今日の物理學者は自ら實用主義といつて居る様であるが、余は寧ろプランクが *Die Einheit des physikalischen Weltbildes* の終りに云つた様に新理想主義と解するのが正當ではないかと思ふ。物理學的知識が構成せられるには、その根柢となるアブリオリがなければなるまい(例へばプランクの *Emanzipation von Anthropomorphismus* といふ如きものがそれである)。物理學的知識は之に依つて構成せられ、この方向に向つて進むのであらう。物理學者が理論の間の調和統一を考へるとか、二つの理論を比較して其一を擇ぶとかいふのは此の如き理想に基くのであらう、此間には所謂實用主義のいふ如き生活の利害といふ如き標準を容れる餘地はないと思ふ。(併し此等の議論は専門家の方にて異論のあることと思ふから、他日の詳論に譲ることとする。)次に近代の藝術に於ても(若し余の見解が誤つて居らぬならば)印象派から後期印象派への推移は正しくマッハなどの感覺主義から新理想主義への推移の意味を有して居ると思ふ。藝術は單に受働的感覺を其儘に寫すのではない、創造作用である、或立場から見ての創造である。後期印象派は印象派の如く單に要素を見ない、全體の順序(*Ordnung des Ganzen*)を見るのである。セザンヌの *absolute Gestaltung* の

藝術は新カント學派の意義を寓するものではなからうか。

以上述べた如く現代の思潮は哲學に於てのみならず、其他科學、藝術などに於ても、一方に於て主觀主義、理想主義なると共に、一方に於て分析的であり多元的であるといふべきであらうが、余はかゝる傾向が必ずしも人文發展の唯一の方向ではあるまいかと思ふ。嘗て啓蒙主義の表面的自覺はカントによつて眞にその内面的我の自覺に達し、十九世紀初期のロマンチズムに到つて深く大なる我の自覺に達した。併し古きロマンチズムは未だ十分客觀其物の根柢に達し、客觀其物をして語らしめた主觀主義ではなかつた、尙客觀を無視した抽象的主觀主義であつた。これその自然科學の勃興と共に、久しからずして滅びざるを得なかつた所似である。現代のロマンチズムは自然科學の煉獄を経たロマンチズムである、自然主義や實證主義の徹底から出た理想主義である。古きロマンチストは抒情詩を歌ふた、新しいロマンチストはドラマチストとならねばならぬ。十分に種々の知識の個性が發揮せられると共に、之を統一するものがなければならぬ。余は現代思潮の一面に於て、アイヒテやシュライエルマッヘルやノヴァーリスを要求すると思ふ。而も今日の思想界がハインリッヒの「青き花」を見出すのは何の日にあるであらうか。